

宮澤賢治センター通信

(岩手大学内)

第2号

発行人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目3番5号
電話 019-621-6672
FAX 019-621-6493
宮澤賢治センター (岩手大学内)
発行責任者 望月善次
(題 字/金森由利子)

目次

- 特別寄稿……………1・2
- 宮澤賢治センターへの期待
- 死生観、生命観と賢治
- 「述懐」考…等身大の賢治を知るために…
- 宮澤賢治センター活動報告……………2～11
- 第1回全国宮澤賢治学生大会の意味……………2～3
- 第1回全国宮澤賢治学生大会の感想……………3～5
- 平成18年9月3日開催バスツアー参加報告……………5～7
- 平成18年10月15日開催ウォークツアー参加報告……………7～9
- 得業論文展を終えて……………10
- 定例研究会/宮澤賢治記念短歌会……………11
- 連載 入門：宮澤賢治の短歌(1)……………12
- 事務局だより/編集後記/奥付……………12

特別寄稿



宮澤賢治センターへの期待

岩手大学学長 平山健一

宮澤賢治は本学の前身である盛岡高等農林学校の卒業生であると共に、その生き方は多くの人々に愛されています。今年の開学記念日に行われた山折哲雄先生の講演「宮澤賢治と斎藤宗次郎」のなかで、山折先生は、宮澤賢治はおよそ二十世紀に最も重視される詩人になるだろうと述べています。

賢治の多面的な生き方に対する評価は様々ですが、賢治はその生前より、むしろ現代社会に於いて人々を引きつける存在になっていくように感じます。国際化した経済活動が格差社会を引き起こし、パレスチナを巡って人間の極限に触れる争いが続き、イスラム社会と西欧社会の対立は深刻さを増しています。現代社会は多様性への理解と寛容さがなければ解決できない困難な課題に満ちていますが、宮澤賢治の思想はこの様な現代

社会の苦悩の解決につながるかも知れないと多くの人が感じているのです。山折先生は「多くの社会人は専門家だけではだめだよと心の底で思い始めている。賢治は専門的な世界から抜け出して普遍的な人間になろうとした、人間的な可能性を追求しようとした」とも述べています。自然に畏敬の念を持ち、自然と共生しながら暮らし、自然と我々の祖先は、さらに儒教と仏教の影響を受けて東アジアの生き方を培ってききました。漢学や七〇〇〇年の歴史を持つエジプトの歴史に関心が高まっていることは現代社会に対する危機感の表れのように感じられます。

本学の中でもようやく学部を壁を乗り越えて宮澤賢治の生き方から学ぼうとする動きが始まっていることはセンターの設立に関わったものとして本当に嬉しいことです。それぞれの人間形成に際して我々の身近にある賢治の生き方を参考にして欲しいと願っています。

「宮澤賢治センター」は大学が支援するNPOとして発足しています。大学が支援すると言ふことは人材の育成や文化の継承にセンターの貢献を期待しているということですが、同時にNPOという位置付けは可能性の段階であることを示しています。本センターの活動が大学の機能の一部を担うだけの力をつけ、社会や大学構成員の期待がさらに高まれば、大学は支援をさらに強めることになりましょう。しかし会のまとまりや機能に混乱すれば大学は支援に消極的にならざるを得ないこととなります。

もともとNPOは様々な想いを持った市民の集まりです。宮澤賢治センターの会員においても「賢治が好き」という

特別寄稿



死生観、生命観と賢治

大学教育総合センター長 玉真之介

ともかく、この作者不明の詩は、最愛の人を失った多くの人の心にしみ入り、反響を呼んでいます。多くの人がこの詩を聞いて、死は終わりではなく、人間以外のいのちに生まれ変わって、今も生きていくという死生観を感じて悲しみが癒されたと言います。それを新井さんは、「いのちの大きな循環」と呼んでいます。

三冊の本の紹介をします。一つは、新井満「千の風になって」講談社、次は、福岡伸一「ロハスの思考」ソトコト新書、最後は、梅原猛「梅原猛の授業 仏教」朝日文庫です。

まず、「千の風になって」は、作者不明の英語の詩の話です。新井満さんが日本語詩と曲を付けました。「私のお墓の前で泣かないでください」

集約する「寛容な知恵」を發揮し、会員の気持ちをもとめ、大学と地域社会から評価される着実な歩みを重ねることを切に期待しています。

著者は、ルドルフ・シェーンハイマーの研究が、デカルト以来の機械論的な生命観を根底から覆したと述べています。シェーンハイマーは、アイソトープで標識を付けたアミ

点では一致しているのでしょうが、賢治に対する思い入れの深さやセンターの運営の方向に対する気持ちは様々です。私の経験したいくつかのNPO組織は常にその様な宿命を持っていたように思います。この様な市民活動の弱さを乗り越えて進めるのが自律的な市民活動のおもしろさであり、素晴らしいことです。

発足後、様々な事業に取り組んできた宮澤賢治センターの活動は高く評価されていますが、これからの会員の思いを著実に実現し、社会にプラスの成果をもたらすためには、自由な議論の場を確保し、会員から信頼されるリーダーが会を引っ張らなければなりません。またリーダーは立ち止まることなく会の活動エネルギーを持続させるための魅力あるアイデアを持たなければなりません。

全ての会員は多様な意見を集約する「寛容な知恵」を發揮し、会員の気持ちをもとめ、大学と地域社会から評価される着実な歩みを重ねることを切に期待しています。

著者は、ルドルフ・シェーンハイマーの研究が、デカルト以来の機械論的な生命観を根底から覆したと述べています。シェーンハイマーは、アイソトープで標識を付けたアミ

ノ酸をネズミに食べさせました。機械を動かす燃料のように、それが分解されて排出されることを予想して。ところが、それらアミノ酸は、全身に散らばり、あらゆる臓器の一部となりました。これは、私たちの身体が静的パーツでできているのではなく、日々、分解と再構成をしているダイナミズムのなかにある。言い換えると、環境の中にあるすべての分子は生命体の中を通り抜け、また環境へと戻る大循環が地球上にあり、生命はその中の「動的な平衡系」としてある、というのです。

福岡さんは、こうした生命観を持つことが持続可能性を考える上で重要だと述べています。この生命観は先ほどの「千の風になつて」を科学

の視点で論じているように私には思われます。

これら二冊には、賢治への言及はありませんが、梅原さんは、仏教に影響された作家の中でいちばん好きなのが賢治であると述べています。「宗教は疲れ近代科学に置換され然も科学は冷たく暗い」と賢治は述べています。梅原さんは、一旦は宗教を捨てて哲学を極めようとして、再び仏教の精神に立ち戻ってきまし

た。というの、遺伝子の立場にたてば、個人のなかに全生物の歴史が入っており、デカルトのような個人を中心とする近代哲学は成り立たないことに気づいたからです。この遺伝子のなかに自らを生かそうとする自利と自分を犠牲にして子孫を残そうとする

利他が含まれています。世界が幸福にならないという個人は幸福はない、という言葉に、科学と宗教の一致を求めた賢治の自利利他の精神が表明されていると梅原さんは述べています。「自利利他の精神を自ずからもっているこの尊い人生を精一杯生きようではないか」と。

実は、福岡さんはエゴとエゴを両端として、エゴではあるけれどもエゴのことも少しは考えた選択をする衣食住のあり方がロハスな暮らしであると述べています。

詩、科学、そして宗教に関する三冊の本は、通じ合っているように私は感じます。賢治への言及は梅原さんだけですが、やはり賢治の世界が広がっているように思われます。

特別寄稿



「述懐」考
：等身大の賢治を知るために

宮澤賢治センター副代表 砂山 稔

賢治の「疑獄元兇」の一節に次のように言う。「こゝで一詩を賦し得るならば、たしかにわしに得点がある。それができないことでもない。題はやつぱり述懐だ。仮に想だけ立てて見る。中原逐鹿三十年、恩怨無別星花転、転と来て転句だ」と。ここで、賢治は登場人物に「述懐」という題の漢詩の冒頭二句を作らせている。

賢治が盛岡中学四年生の時に手に入れた「和漢名詩鈔」は、母木光氏宛の手紙の中で「昔の漢詩人たちなど、この溜つたものを原動力にして更に仕事し、慷慨の歌悲傷の詩を生々と作りだしたりしたやうですが」と言っており、漢詩人の心の文を詠じた詩歌に注目している。先の「述懐」は正にこの「懐（おもい）」を「述」べる詩（うた）なのである。

賢治が盛岡中学四年生の時に手に入れた「和漢名詩鈔」は、森槐南閣、結城蕃堂編）に「述懐」なる題の詩が唐の建国の功臣である魏徴の作をはじめとして源齊昭、蒲生君平等の作など数首が収録されている。このうち、魏徴の作は「唐詩選」にも収録されている著名なものであるが、その冒頭二句には「中原逐（ま）た鹿を逐ひ、筆を投じて戎軒を事とす」と言っており、「中原に鹿を逐い、つまり天下を争って、兵事を用いたことを

述べる。「疑獄元兇」の「述懐」では、「中原に鹿を逐うこと三十年、恩怨別なく星花転ず」とすなわち、三十年の間、天下を争ったが、恩と怨みの別なく、星や花は移ろっていくと人間の野心と自然の移ろいについて述べる。賢治の在世当時の漢詩の流行の様子は種々指摘されているが、人間が心の丈を語る時、漢詩が有用であった。賢治はそのような時代に生きた人であったことは、等身大の賢治を知ろうとする際に再確認しておいてよいことである。

（奥田弘著「宮澤賢治研究資料探索」も参照されたい。）

八月二十八日(月)
 一、大会概要
 善次(賢治センター代表) / 稲垣大助(大会実行委員長) / 祝辞・平山健一(岩手大学学長)

八月二十八日(月) 13:00~14:30
 基調講演 P.A. ジョージ
 (インド、ジャワハルル・ネルー大学・JNU 准教授)
 「宮澤賢治の菜食主義とインド菜食主義について」
 原子朗
 (宮澤賢治イーハトーブ館館長)
 「賢治の孤独」
 パネルディスカッション
 「学生の見る宮澤賢治」/ コーディネーター 望月善次



大会会場

記念すべき第一回全国宮澤賢治学生大会は、二〇〇六年八月二十八日(月)・二十九日(火)に、賢治にも縁りの深い岩手大学農学部附属農業教育資料館を会場に行われた。以下その報告をするわけだが、概要については、準備状況も含めて、既に本通信創刊号や学生大会のホームページやマスコミ等でも知られてもいるところだから、所説「報告」的部分は、できるだけ簡単な形として、「その意味」に集約する形で述べたいと思う。

研究交流 10:00~12:00
 深見美希(日本女子大学大学院)「賢治作品における演劇空間Vに関する一考察」身体性と一体化現象」
 稲垣大助(岩手大学大学院)「ディベート的見地から見る『ビジテリアン大祭』」
 下家美里(岩手大学大学院)「宮澤賢治の童話における父と母の位置づけに関する一考察」
 芳賀洋平(盛岡大学)「啄木・賢治研究会の現在と明日」『どんぐりと山猫』を中心として」



平山学長あいさつ

宮澤賢治センター活動報告

第一回全国宮澤賢治学生大会の意味

～学生達の意欲と力に目を見張った～



宮澤賢治センター代表 望月 善次

飯村裕樹(岩手大学)、佐々木瞬(岩手県立大学)、濱田奈緒美(盛岡大学)、松下香奈(高知大学)

■エンディング・講評
 17:00~17:15
 ◇玉真之介(岩手大学副学長)

八月二十九日(火)
 9:00~12:00
 実地研修(学生の案内による盛岡市内の賢治縁りの場所)閉会式(岩手公園)
 講評・望月善次
 閉会挨拶・稲垣大助



準備風景

二、学生達の意欲と力量

何と言っても特筆すべきは、学生達が意欲と力量を見せたことである。「宮澤賢治センター」の立ち上げが、六月一日であったから、準備期間も十分ではなかったわけであるが、稲垣委員長を中心として、岩手県内三大学(岩手大学、盛岡大学、岩手県立大学)の有志を集め、全国五十近く

の関係大学に働きかけ、宮澤賢治学会イーハトーブセンターの支援も受け、大会を成功させたことの意味は、どんなに強調しても強調し過ぎることではないだろう。盛岡中学校時代は、上級学校進学希望がなく腐っていた賢治が、盛岡高等農林への進学を契機として甦ったように、しかるべき場があれば、学生達は力を発揮するのである。今回の大会も、そうした(場)たり得たわけで、新聞・テレビなどのマスコミも挙げて取り上げた理由も、そうした学生達の意欲と力を察知したからであろう。改めて学生諸君に敬意を表したい。

三、発展する学生の意欲と上の世代の留意点

全国宮澤賢治学生研究会も結成される

第一回全国宮澤賢治学生大会の意味は、単に大会を成功させただけではない。この成功に基づいて、発展的な方途を講じたことである。具体的には、学生大会の中心を担った岩手県内三大学(岩手大学、盛岡大学、岩手県立大学)の学生達を中心に、十月に「全国宮澤賢治学生研究会」が結成された。既に十一月、十二月と三回の研究会を行い、この通信がお手元に届く頃は第四回も終了しているはずである。

学生達の上の世代のなすこととは、この学生達の意欲に水



準備風景

四、二人の講演者の縁と熱意

原子朗宮澤賢治イーハトーブ館館長とP.A. ジョージ博士の講演も第一回大会に相応しいものであった。先ずは、岩手大学と縁の深い二人をお迎えできたことがありがた

いことであつた。原館長は、かつて農学部の百周年の際の記念講演もあつたし、ジョージ博士は、教育学部の客員研究員の体験もある方である。講演の内容に詳細に触れている余裕がないのが残念だが、「賢治の孤独」と題された原館長の講演は、賢治を学ぼうとする学生達を直接の対象としたものであつたが、筆者がお聞きした原館長のお話の中でも熱のこもつたものであつたことを記しておきたい。また、ジョージ博士の菜食主義に関する講演は、ベジタリアン

とノン・ベジタリアンは別の席となるし、飛行機などに乗つても「vege or nonvege」は必ず聞かれる質問である。)文化を踏まえた発言であり、単なる個人の研究を越えて文化的背景をもつた講演であつた。

五、課題を克服しながら、一層充実した第二回大会へ

このように大成功に終了した第一回大会であつたが、もちろん課題がないわけではない。先ず、第一回は、周知期間が短かつたこともあり、全国的な働きかけが十分であつた。参加者の学生諸君の多くも、大会運営の切り盛りをするのが精一杯で肝心な研究交流や講演の場への参加者が十分ではなかつた点であろう。しかし、困難な条件の中か



稲垣大会実行委員長あいさつ

まず始めに、賢治生誕一〇〇年という記念すべき年に、実行委員長として「第一回全国宮澤賢治学生大会」を運営できたことを光栄に思う。私並に他の構成員はそこで多くのことを学び、考えさせられたと思う。その中で、本学生大会を自分なりに振り返りたい。

本大会は「第一回」大会である。私自身、実行委員長という立場で学生大会を進行、また運営したことを通して、その「一」という数字には、様々な意味が内包していると感じた。第一には「創造」が挙げられよう。初めての試み(創造)には苦難がつきものである。特に、これまで何ら

第一回全国宮澤賢治学生大会の感想

か形で運営に携つた経験がある者が、メンバーにいるのではないのではその質に雲泥の差が生じるだろう。今回は、そういった経験者がいなかったこともあり、様々な面で手順の違いがあつたように思える。しかし、私はこのよ

うな一連の「違い」が、「間違えたことから学ぶ」という一つの契機を与えてくれたと捉える。これからの面では、学生大会という本体を創り構成していく上での土台として、このような経験を積み重ねながら、経験豊富な、歴史に残る学生組織の創造を目指すことが重要である。

第二には、「希望」を挙げたい。本大会を実行したこと、換言すれば「矢は放たれた」のである。後は、反省点は随時克服していき、よりよい形で段階を踏みながら次回、その次へと継続させていく。

今後の学生大会の運営はそのことに尽きるだろう。学生の幅を広げること、学生参加者の数を増やすこと、広汎な形で全国の学生を募ること、等課題は多々あるが、それらをそのまま踏襲するのでなく、変革し新たな創造の構築を図ることを今後の大きな目標として位置づけ、次回の第二回大会につなげていきたいと考える。



実地研修で説明する望月先生

参加させていただいたことは、私にとって宮澤賢治を今までは違った観点から見るといふことに気付いた貴重な時間でした。

私が参加したのは、学生同士のパネルディスカッションで、パネルディスカッションは、学生のバネラーが宮澤賢治について、関心があることについてそれぞれ発表し、それをもとにバネラー同士、そして、観客の方との質問を中心としたやりとりをするというものでした。バネラーは普段はそれぞれ異なる分野を研究している学生でした。そのため、同じ「宮澤賢治をテーマにしても、発表はそれぞれまったく違った観点からのもので、どれも興味を湧く内容でした。その他にも、観客の方とのやりとりの中にも、普段の大学内での研究では気付くことのできない考えがあることがわかりました。

この事が、この大会で私が得たことです。賢治について詳しい知識がない中で参加しましたが、この大会をきっかけに、より賢治について学んでいきたいと思います。

参加する機会を与えてくださった望月先生、稲垣さん、ありがとうございます。

学生大会の進むべき道
この学生大会は、イントロにすぎない。学生大会全体への感想は「第一回全国宮澤賢治学生大会の意味」において記したので、学生諸君のコメントに対するコメントを加えたい。

副題に掲げたのは飯村裕樹君の文章の一節である。「僕が今、若手大学に在るのは間違いなく『宮澤賢治』がきっかけである。」という希有な出会いから、副題に続く「ここからが本当の始まりだ。」は大会発展の核心だと見た。「研究交流」に名乗りをあげてくれた。「演劇入空間」に関する深見論の深まりの契機がこの大会にもあったのだと「後の史家」に書いて欲しいものだ。

下家美里さんの「賢治童話の父と母の位置づけ」という観点も興味深く聞いたし、芳賀洋平君は、研究発表はもちろん大会運営においても中心的な一人だった。佐々木瞬君の「もつと学生の手と学生の観点」は、今後の大会運営について最も重要な点の一つであろう。濱田奈緒美さんの清新さ。これも、また学生大会において欠くことのできぬものである。



天気輪

はじめに
九月三日午前九時に若手大学正門に集合した中国人留学生五名を含む総勢二十四名の一行は、早速バスに乗車して、清養院を目指した。私たちの旅程は、盛岡市内の清養院、教浄寺、光原社をまわり、十二時に花巻駅前にはんブラザのからくり時計を見て、やぶ屋で昼食。その後、羅須地人協会跡地、イギリス海岸、花巻農業高校敷地に移転された羅須地人協会をまわり、宮澤賢治記念館、南斜花壇を経て宮澤賢治イーハトーブ館図書室、ぎんごろ公園、最後に身照寺で賢治のお墓参りをして帰路につくという盛りだくさんなものであった。

名ガイド望月先生、花巻ご出身で「どこでもござれ」の名運転手松山さんをはじめ、絶好の天気にも恵まれた私たちは何度も幸運を実感しながら予定時刻の五時きっかりに大学に戻った。望月先生が「できれば普段見られないものを見る」ことを目指して入念にご準備下さった旅程のおかげで、花巻初心者にとっても非常に分かりやすく、また、数回目の訪問者にとってもそれぞれに新しい発見や感動に満ちたツアーとなった。以下、簡単に当日の足跡を記し、名ガイド望月先生による説明を加えたい。

盛岡にて…清養院、教浄寺、光原社
大学の正門を出たバスは、賢治が盛岡中学（現盛岡一高）の寮を追われた後に滞在した清養院に向かい、ご住職の説明をお聞きする。宮沢家とは関係がない清養院に賢治が身を寄せた明確な理由は分からない。当時の寺は困った人を収容する施設としての役も果たしており、賢治のような人たちが集まり暗い寺に寝起きしていたそうだ。

頂いた事は、自分にとって、またこれからの研究会活動に向けた自信となりました。次回の大会では後輩の発表をサポートする側になるかと思いますが、今回の経験を元にさらに活発な交流がされる事を期待したいです。

岩手県立大学ソフトウェア情報学部四年 佐々木 瞬

初日のみの参加となったが、参加した結果私はよい経験を得られたと感じた。当日は機材の準備などで他の方の発表や講演は聴くことができなかったのだが、パネルディスカッションに参加してみても、自分たちの考えとはまた別の視野が存在するということを感じられたことだった。但し残念なこともあった。パネルディスカッションが形式にとられすぎて、学生主体の大会でなくなっているように感じられたことだった。それまでの司会進行役である学生ではなく教授を進行役に据え、発表時間が目立つ内容になってしまっていた。その結果、学生同士のディスカッションというものは形骸化してしまい、プログラムどおりに事を進める一種のショーに成り下がってしまったといえなくもない。

私はあのパネルディスカッションで議論を交わせたとは思っていません。

寄進札をそろに詠みて
僧の妻庫裡にしりぞく
いまはとて異の銅鼓うち
晨光はみどりとかはる

一行は、材木町の光原社を訪れた。盛岡に住む賢治ファンなら誰もが訪れたことがあるが、光原社にはあるが、今回のツアーで私たちは未知の世界に足を踏み入れることとなった。光原社は当時無名であった賢治の「注文の多い料理店」の出版社（移転先）としてあまりにも有名である。望月先生より、光原社の及川四郎氏が無名時代の多くの芸術家たちの世話をし、育てることに貢献されていたという説明を受ける。

行き慣れた光原社の敷地には、普段は気づかなかつたが、りっぱなお蔵があり、及川氏のお嬢様である川島年子さんが私たちの到着を待っていて下さった。私たちは染織工芸の芹沢銈介、漆工芸の鈴木繁男、彫像の吉川保正、版画の棟方志功などの作品を見ることになった。

望月先生のおっしゃるとおり、私たちは文字どおりの「お宝」に触れ、こんな近くに優れた美術館があったことを知り驚いた。展示してあった棟方志功の直筆の絵が描かれた布を、昔は買い物袋として使用していたというお嬢様の話には一同驚愕した。及川氏の周囲に才能ある芸術家がどれだけ集まり、それがいかに日常的な様子であったかを示すエピソードであろう。

岩手大学教育学部
生涯教育課程一年
飯村 裕樹

僕が今、岩手大学に在るのは間違いなく「宮澤賢治」がきっかけである。どこかの大学へ行こうかと途方にくれていた僕に、差し出された「岩手大学」という選択。頭によぎったのは、小学生時代に読んだ宮澤賢治の童話の世界だった。そんな賢治の魅力に誘われるまま、僕はまだ肌寒い四月の岩手県にいた。これが全ての始まりだった。そして、僕は「賢治について知りたい」という思いを行動に起こしていった。望月先生に出会い、稲垣さんに出会った。そして、この「第一回全国宮澤賢治学生大会」へと辿り着いた。

学生大会は新たな学びの連続であった。一つ目は、勿論「賢治についての学び」であった。賢治研究の第一人者である、原子朗先生やインドからお見えになったP. A. ジョージ先生の講演をはじめ、各大学の学生による研究交流と新たな賢治の学びの契機となった。二つ目は「大会運営という学び」である。大会運営にあたっては、実行委員ということ活動させていた。稲垣さんの活動もあって、八月の夏休みを返上して準備にあたり、まだまだ力の及ばない僕には、できる仕事は限られており、諸先輩方の背中を追いながらの仕事だった。しかし、そこからは多くのことを学べ



パネルディスカッション風景

「学生大会」において、多くを学ぶことができ、研究交流では、今後の課題として重要な指摘を頂きました。稲垣氏、下家氏、芳賀氏の各論からは、実証性と考察、方法論等を学ぶことができ、多くの示唆に富むものでした。一方、パネルディスカッションの交流や、岩手県立大学の「賢治プロジェクト」を通じて、学部横断的な観点が、既存の世界観に与える多様な可能性を実感しました。原先生、ジョージ先生のご講演、望月先生、ご来賓の先生方のご指摘は、非常に励みになりました。また、大会に参加された方々の、賢治への真摯な思いが、様々な瞬間に心から心へ、伝わっていたように思います。今後、賢治の魂が息衝く岩手の大地から全国へ、活発な交流が行われることを願います。最後になりましたが、大会運営に御尽力された関係者の方々、実行委員の方々に厚く御礼申し上げます。

岩手大学人文社会科学部研究科
一年 下家 美里

大変有意義な二日間でした。私自身の発表は拙いものですが、原先生にお話をいただいたり、他大学の学生の研究や研究会の状況を垣間見ることが出来、大変勉強になりました。数え切れないほどのアプローチ法があることに改めて気付かされ、また個人的に新しい発見があり、まさに賢

治の姿の一つを見たような気がします。これからも多くの交流の中で自分の研究を深めていけたらと思います。ありがとうございました。

盛岡大学文学部日本文学科
三年 芳賀 洋平

今回の大会は、初めての体験が多く、また全国というプレッシャーを感じながら手探りで発表資料を作っていたこともあり、戸惑いもありました。大会には準備段階から参加させて頂きましたが、岩大の先生方や学生の方々の学部を越えたチームワークの良さには驚きと同時に感心させられました。私自身も研究会の代表として今後の活動でさらなるチームワークの良さを出せるようにしていきたいと考えています。発表そのものは緊張の度合いがいつもよりも増して高かった事を覚えています。その分、原子朗先生をはじめ多くの方々に称賛のお言葉を



会場内の様子

初日のみの参加となったが、参加した結果私はよい経験を得られたと感じた。当日は機材の準備などで他の方の発表や講演は聴くことができなかったのだが、パネルディスカッションに参加してみても、自分たちの考えとはまた別の視野が存在するということを感じられたことだった。但し残念なこともあった。パネルディスカッションが形式にとられすぎて、学生主体の大会でなくなっているように感じられたことだった。それまでの司会進行役である学生ではなく教授を進行役に据え、発表時間が目立つ内容になってしまっていた。その結果、学生同士のディスカッションというものは形骸化してしまい、プログラムどおりに事を進める一種のショーに成り下がってしまったといえなくもない。

私はあのパネルディスカッションで議論を交わせたとは思っていません。

岩手県立大学ソフトウェア情報学部四年 佐々木 瞬

初日のみの参加となったが、参加した結果私はよい経験を得られたと感じた。当日は機材の準備などで他の方の発表や講演は聴くことができなかったのだが、パネルディスカッションに参加してみても、自分たちの考えとはまた別の視野が存在するということを感じられたことだった。但し残念なこともあった。パネルディスカッションが形式にとられすぎて、学生主体の大会でなくなっているように感じられたことだった。それまでの司会進行役である学生ではなく教授を進行役に据え、発表時間が目立つ内容になってしまっていた。その結果、学生同士のディスカッションというものは形骸化してしまい、プログラムどおりに事を進める一種のショーに成り下がってしまったといえなくもない。

私はあのパネルディスカッションで議論を交わせたとは思っていません。

岩手県立大学ソフトウェア情報学部四年 佐々木 瞬

初日のみの参加となったが、参加した結果私はよい経験を得られたと感じた。当日は機材の準備などで他の方の発表や講演は聴くことができなかったのだが、パネルディスカッションに参加してみても、自分たちの考えとはまた別の視野が存在するということを感じられたことだった。但し残念なこともあった。パネルディスカッションが形式にとられすぎて、学生主体の大会でなくなっているように感じられたことだった。それまでの司会進行役である学生ではなく教授を進行役に据え、発表時間が目立つ内容になってしまっていた。その結果、学生同士のディスカッションというものは形骸化してしまい、プログラムどおりに事を進める一種のショーに成り下がってしまったといえなくもない。

私はあのパネルディスカッションで議論を交わせたとは思っていません。



パネルディスカッション風景

考えていない。バネラー同士の意見の交換もすくなく、会場からの質疑応答では自身の意見のみを声高に叫ぶ姿しか見えなかった。

時間が限られているというなら、パネルディスカッションをメインに据えてもよいだろう。それだけの価値があると思はれる。

確かに先生方の講演も意義のあるものだと思うが、それでは学生のための大会ではなく学生が運営しただけの大会になってしまいうだろう。

次回もこういった機会があるならぜひともその点は注意してもらいたい。

いつものこと先生方は観客席で見えていたのだが、一切口を挟まないというのはどうだろう。

そのほうが学生が遠慮なく発言出来て、新たな発見も出てくるかもしれない。

盛岡大学文学部日本文学科
三年 濱田 奈緒美

第一回宮澤賢治学生大会に

花巻にて..なはんプラザ前、やぶ屋、羅須地人協会趾地

十二時になはんプラザ壁面に付けられた時計で「星めぐりのうた」を開き、時計の中を走る銀河鉄道や、その旅程に現れる登場人物たちが活動するからくりを見ることに間に合った私たちは、「岩手軽便鉄道花巻駅跡」という碑を見学し、賢治が天ぷらそばとサイダーをとることが好きだったという「やぶ屋」でお弁当の昼食をとる。「やぶ屋」は広い専用駐車場をもち、エレベーターが備えられている。一度に大人数の観光客を招くことができるような近代的な飲食店に、賢治が通った面影を感じたことは残念ながらできなかったが、「この場所に賢治が通った」という感覚を堪能した。



彌助橋跡

賢治の父親と懇意な間柄であった斎藤宗次郎が新聞販売所を開いていた求康堂跡地に建つ阿部クリーニング店や、「春と修羅」の印刷所といわ

れている照井菓子店、そして賢治の生家を車窓から眺めた後、賢治が奥州街道に残された三本の松を切るか切らないかをめぐって生徒にディベートさせたという南城小学校の松の木の横や、羅須地人協会時代に賢治が人足体験をした弥助橋跡を通過する。

私たちが賢治にゆかりのある数々の場所を通り、羅須地人協会趾地と高村光太郎が誤脱字のため追刻をしたこと有名な宮澤賢治詩碑が建つ場に到着した。趾地にあった説明文を引用する。「ここはかつて花巻川口町下根子桜八景とよばれたところ、そのころ証書の二階家が立っていましたが、宮澤賢治は大正十五年三月末に花巻農学校教諭を依頼退職し、四月にはこの家に移って独居自炊の農耕生活を始めました。そして、その理想であった「羅須地人協会」を開



羅須地人協会趾地より見た「下ノ畑」

イギリス海岸、羅須地人協会、宮澤賢治記念館、イーハトーブ館

イギリス海岸に向かう車中、望月先生より、瀬川の位置が賢治の頃と変わっており、賢治がドーヴァー海峡にたえた白い岩が、水が引いても水面上に出にくくなっていることを聞く。また、同じ岩手県出身の石川啄木は東京に志向があったが、賢治は西欧に視野が向けられていたとの説明を受けた。当地の説明文には、「イギリス海岸」とは、河床に現れる溶岩地形とその一帯の風景を見た宮澤賢治がイギリスの風景になぞらえて名付けたものです」とある。私たちは、水面上に出ているほんの少しの白い岩ばかりか、水面下の岩が水を透かして映っている川面を見ることができた。

なかなか見ることができないというイギリス海岸の面影をたまたえた川べりを後に、私



羅須地人協会前にて、鹿踊りの装束に身をこめた花巻農業高校の生徒さんたち

ので、もっと勉強したくなった。「盛岡に来て十一年だが、関東に住んでいたときに啄木、賢治のことはほとんど知らなかった。花巻は初めてだったのでとてもうれしかった。「一日で賢治の生涯をながめてきた気がします。実りの多い日を過ごしました。「一日かけて賢治を堪能し、彼を再発見した良い日だった。「参加した中国からの留学生の日本語が上手で驚いた。「望月先生のチャイミングな案内が楽しかった。中学で「オッペルと象」を読んだことが賢治との出会いで、これからは賢治を土着からみていきたい。土着と活字の関わりを探ることが楽しみです。「初めて賢治のゆかりの地を訪れ、実際に自分の目で見たことで多くのことを学んだ。「鹿踊りを実際に見ることができなかったのが一番の心残りです。「望月先生という最高の解説者がいらしたので勉強になりました。「若い人が賢治を勉強して、彼

の生活を人生に活かしていけるのはうらやましいので、皆様、頑張ってください。「作品の舞台を目で見ることができた。中国に帰って自慢話をしたい。花巻の美しさと楽しさを体験することができた。望月先生は狭い意味の賢治研究ではなく広く賢治に関心をもってもらえるように、また、参加した留学生たちに岩手の一部を知って欲しいと思つてこのツアーを計画されたこととお話された。そして、つぎの三点に感謝を述べられた。第一に、天候や、関係各所の方のご支援に恵まれたこと。今回ほどいろいろなことがスムーズにいったことはない。第二に、花巻に詳しい松山さんという運転手さんをツアーにお迎えできたこと。全行程を回れたことはまれであり、羅須地人協会ではバスで奥まで入ることができた。「第三に、参加してくださいました皆さんに感謝します。」という言葉で、一日のツアーは拍手喝さいをもってお開きとなった。

おわりに

歴史上の人物や文学者ゆかりの地をめぐると、変わってしまったものと、変わっていないものが存在することに確かな時間の流れを痛感する。今回のツアーでも、瀬川や豊沢川の流れが変わること賢治の見た景色と私たちが眼にしたものは変わってしまった。羅須地人協会が賢治が奮闘しながら見た景色

は石碑の建つ跡地となり、彼が過ごした家は花巻農業高校の敷地に移っていた。私たちが訪れた花巻は賢治が生活した空間とは異なっていて、水面下の岩が水を透かして映っているが、盛岡と花巻両地の賢治が生活した証を残そうとする試みの中に、現在という時間の中に賢治が息づいていることを感じる事ができた。賢治がかつて暮らした盛岡と花巻という場所は、姿を変えてはいてもたしかに現在も土地の精神を湛えてそこに在った。

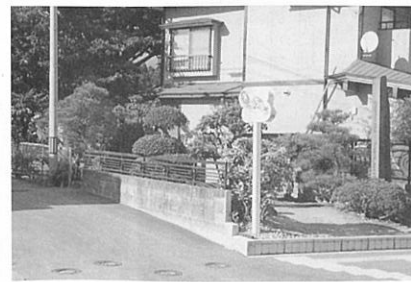
花巻に十二時前に到着することができた私たちはからくり時計前を陣取ることができたり、「こんなイギリス海岸は何度訪れていてもあまり見られない」と言うほどの絶景を前にしたり、羅須地人協会ではNHKの放送で出番を直前に控えた、鹿踊りの装束を身にまとった花巻農業高校の生徒さんたちに遭遇することができると、いくつもの幸運な「偶然」に恵まれた。また、望月先生のご準備により行く先々で清養院や教浄寺のご住職さんや光原社の川島さんが私たちの到着を待っていて下さった。偶然や出会いや天候も含めて、この特別な一日は、賢治が花巻を訪れた私たちをもてなすために準備したさまざまな心づくしのよう

に私には思えた。帰路に抱いた満ち足りた暖かな気持ちに、賢治の「また訪れないメッセージ」という聞こえないメッセージを確かに「聞いた」気がした。

私たちは花巻農業高校の敷地に移された羅須地人協会の家に向かった。この二階建ての家は、もともと賢治の祖父の別荘であり、トシが闘病に伏せた後に、羅須地人協会として賢治が理想を掲げて暮らした場所である。賢治をはじめ宮沢家の方たちが代々使ってきた家の中で、私たちは宮沢家の歴史の中に身をこめた。花巻農業高校の生徒さんによる鹿踊りの舞の披露直前に、私たちは後ろ髪をひかれながらつぎの目的地へと向かった。宮澤賢治記念館敷地内の資料を納めたお蔵を外から拝観して神聖な気持ちに浸る。記念館前の「猫の事務所」の二匹の猫が設置された記念写真スポットでは、事務所の猫に負けないくらい「偉そう」な面持ちで写真に収まったりして過ごした。イーハトーブ館までの下り坂には望月先生により年齢による課題が設けられた。学生は南斜花壇を渡る遊歩道を歩くことが必須と言われ、それ以外の方はバスでイーハトーブ館まで降りることとなったが、私を含めて数名の学生でない参加者は無謀な試みに挑戦をし、無事に下まで降りることができた。

小沢書店刊)も取められていくことを確認した後、豊沢川のさいかち淵跡地を訪れた。望月先生より、豊沢川淵近辺には二箇所の子供たちが遊ぶ場があったが、まとめて「さいかち淵」と呼ばれていたとの説明を受けた。賢治作品に登場するさいかち淵とはどのような場所であろうと期待していた私の眼に映ったのは、民家の横にもうけられた一区画の土地に建つ細い石碑と、「さいかち淵碑」と書かれた道路標識のような一本の看板であった。豊沢川の流れが変わったことである。賢治が変ったことである。

バスは、親友阿部孝の住居跡である鮎幣稲荷神社前を通り過ぎた。花巻農学校跡地であるさかち淵公園で「早春」の詩碑や、賢治が好きだったというさかち淵の葉がそろそろ沈みかけてきた太陽の光を銀色に反射させるのを見た後、身照寺の宮沢家の墓に立ち寄り、日蓮宗を表わす五輪塔を模したお墓に手を合わせ、一日の感謝とともに、私たちはそれぞれ賢治と話をする機会を得ると、高速にのって帰路についていた。



さいかち淵跡地

一日のツアーを終えて、車中ではマイクがまわされ、一日のバスツアーの感想が交換された。一部を列挙して紹介したい。「つぎにやぶ屋に来たときには天ぷらそばとサイダーを頼みたい」「イギリス海岸が見られて運がよかった。鹿踊りを控えた生徒さん

網張街道から七ツ森



網張街道から七ツ森

平成十八年十月十五日開催 ウォーキングツアー 参加報告 長編詩「小岩井農場」歩行コースをたどって

岩手大学工学部卒業生 姉 齒 武 司



小岩井農場

今回、著書「賢治歩行詩考」

で本年度宮澤賢治・奨励賞を受賞した岡澤敏男さんの案内で賢治が長編詩「小岩井農場」で歩行したであろうコースを御一緒し、解説していただけたことになりワクワクして参加しました。書き表された八十四年前の小岩井と現在の小岩井との変化の比較と賢治の長編詩に添っての解説をしていただきました。

パート1

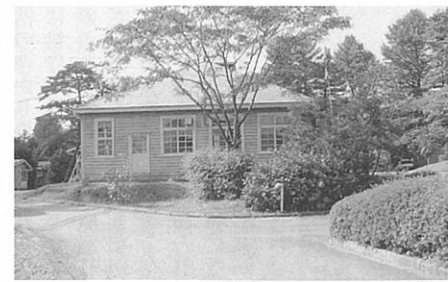
賢治の長編詩「小岩井農場」を小脇に抱えて「詩」と「現場」を照らし合わせ、その都度、岡澤さんからの解説を受けながらの歩行が始まりました。この長編詩は賢治の「せはしい心象の明滅」の上でゲートの言う「詩と真実」、賢治としては「四次元」の世界の叙事詩を書き表していることをあらためて知りました。

パート2

網張街道は直線の一本道でした。当時は道端に家も無く、何の変化も目印も無いところだったので、歩いて来た人は心細く、特に冬道では道を尋ねたくなるに違いありません。

左折地点より旧小岩井農場入り口.....10..25

賢治は「黒いながいオーバ...」を著した医者らしいものに「本部へはこれでもいいんですか」と聞かれたことに、「ぶつきた棒にああと云った」事を「大へんかあいそいな気もした」と語っています。ともかくずっと一本道でした。



本部棟



くらかけ山が見える

旧小岩井農場入り口より本部の気取った建物迄

賢治が「水が暗くそして鈍っている」といった「巡り沢」に橋が架かっており、ここが(パート3)の入り口です。そこには賢治の当時の「禁猟区」ではなく、「鳥獣保護区」の看板が錆びてポロボロになり木の陰に隠れていました。

「ぢき院もある」といった医院跡を見、そのすぐ裏に今は農場の建物として使っているが、以前は小岩井農場の旅館であった「桃水閣」の跡を見ました。当時は訪問客の旅

パート3

「鳥」(むく鳥)も「荷馬車」も「松の丸太」も「馬車挽きたち」も残念ながら時代の変遷の中見ることができず、ただ「本部の気取った建物」だけが歴史の流れに押し流されて、その流れをかわして、時を建物に刻みそつとたたずんでいるようでした。

パート4の1

「本部の建物から耕耘部への近道」... 11:20

その上屋根の頂点部分に「望楼」まであります。あの小型の建物に「望楼」までついているのは「気取った」と賢治の言うのはわたしも同感です。しかし、小岩井開墾当時の原野の中で、木々の生長度からすると飾りと言うより農場の状況、働く人々の姿を直接観る上で実用として建築されたのでしよう。そして「さびしい観測台」と詠われていた小岩井の気象観測台は、大正十二年盛岡測候所開所の前年大正十一年には解体され無くなっていったと言ふ事は、岩手県庁の気象観測の歴史を知る上で貴重な傍証とも言えるでしょう。本部の斜め向いにある「冬にはこの凍った池」は草や水草がびっしり生えて、このままでは凍っても「氷溜り」などとてもできない状態です。当時の業務日誌に書いている大人たちの雪掻き、池の中の草刈等の手入れのほうが大変だったのではないのでしょうか。しかし、「こどもらがひどくわらった」声と「まつ赤」な「類つべた」声とが大人たちのその苦勞も忘れさせた事でしょう。寒さの中で、原野の無くなった今に比べて特に激減した小鳥(ひばり、ムク鳥)が環境の大きな変化

パート4の2

「耕耘部への近道から四階倉庫」... 11:30

(パート2)で左折して網張街道を歩いてきた我々はいよいよ街道と別れ、現在の小岩井まきば園への道に入りました。「まがりかど」には一本の青木が当時の目印だったのしょう。賢治の当時は「本部」前から馬車鉄道が、農場では「馬トロ」と呼んでいたようですが、育牛部事務所現在の展示資料館まで走っておりその通りが小岩井の「本部」でした。冬は「馬糞」もかよっていった「耕耘部」へはここから行くのがちかいか「道」が現在の県道219号・網張温泉線です。岡澤さんの案内でここから十分ほどの歩いた距離に賢治が、(De Heilige Punkt)「聖なる地点」を感じたと言ふ広い耕地が現れました。緑の斜面で上方

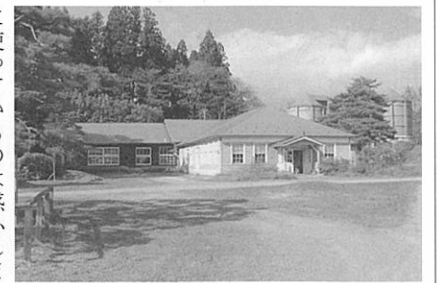


賢治の聖なる地点といわれる所

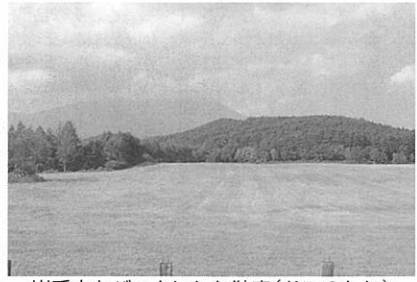
パート5

「四階倉庫から耕耘部事務所、育牛部事務所」... 12:10

(パート5)は本文には無く、先駆形A、Bにあります。小岩井小学校の前で「本部」に出あって、少し網張温泉線を歩くと、鞍掛が暗くて非常に大きく見える「所」に出ました。そこから県道を外れて四階倉庫を左に見て、耕耘部事務所前を通り再び県道に出ました。四階倉庫を建設したのは大正五年とのことで今から九十年前、木造四階建てでこれだけ高く、大きな建築物を作ったことは当時として大変なことだったろうと思います。或は「五重の塔」の技術を使ったのかも思いました。ともかく当時の心意気を感じられました。それにしても古い建築物を現在も大事



展示資料館



岩手山をバックにした狼森(おいのもり)

きつこのあたりを歩いてきた時かもしれません、「フウ」と大きな吐く息の音がし、馬トロが直ぐ脇を通り過ぎたのです。二人ともビックリ「フウ」と言い飛び退き、そのあと大笑いしました。馬はアツという間にスーと通り過ぎ、飼葉の匂いをのこして行きました。その後、トラツグが通りすぎるたび土埃のすごさで、道から農地に逃げ込んで埃が落ち着くまで出来るだけ息をしないでじっと待っていました。その後は二人のあしはますます重く、距離はどんどん離れるばかりでした。

あの時は小岩井のどこを見たいか思い出せません。ともかく当時は「まきば園」はまだ出来ていず(昭和四十二年開園)観るとは育牛部ぐらいたったのかも知れません。それに歩く以外に無かったでしょう。ただ思い出にあることは「歩いた」事と「暑かった」事と「驚いた」事だけです。賢治は学校で日直をしてい

堀籠さんのことをいろいろ考えながら、早く帰ってチョココレートを食べながら話したい様子で、柳沢を通じて滝沢駅から汽車に乗るのでは遅くなるし、鬼越を通り盛岡駅から帰るか、戻って小岩井駅から早く帰花するか決めてねている様子です。途中耕耘部に帰る農婦の一人と会い時間を聞きました。この農婦の一人と会った場所は県道からはずれて、より東側の農道でその事とされます。そして皆と一緒に育牛部に出かけます。我々は賢治のコースから離れて展示資料館奥の方に「賢治詩碑」のところで昼食を取り、岡澤さんから又いろいろのエピソード等を聞きました。



展示資料館奥の賢治詩碑

昼食後、散歩道を通り小岩井工場へ出て駐車場から狼森を見つめ、県道網張線に出て少々北上し「まきば園」の緑の滝沢村道を東に向かいまします。その道は農場の長者館2号畑の中間を通り北部を2号の1、南部を2号の2とい

その分岐線の中程の地点まで歩行し、説明を受けながらまきば園に戻り解散になりました。まきば園からは十五時発のバスで盛岡駅まで直行でした。以上でウォークは終了でしたが長編詩「小岩井農場」は(パート6)(パート7)(パート8)と続きます。しかし、(パート9)が本編にも先駆形A、Bにも無く急に(パート9)になった件で、岡澤さんが賢治のミステリーを解き明かしてくれました。それは(パート7)で雨が降り出し畑で農夫達に会い駅に急いでいることを話した事で、馬車に乗せてもらったのではないかとこの詩篇は「歩きながら一遍の詩の原型」を示すことにはいたため、馬車に乗せてもらったこの部分を省いたのではないだろうかと言ふことです。私も(パート1)で「わたくしにも乗れたいへばいい」、今日ならわたくしだって、馬車に乗れないわけではない。等馬車に乗ることや馬がそばを通り過ぎることを賢治が気にしすぎるとの思いがし、なんとなく気がかかるものがありましたが、(パート1)に伏線として(馬車に乗る)と言ふ事を書いていたのではなかったのかと思いました。

最後に(パート9)については、岡澤さんは、「ユリア、



牧野より岩手山をのぞむ

ペンベル、(ツイゲル)の3人を同人誌「アザリア」の河本義行、小菅健吉、そして保坂嘉内を表す」としており、特に一時理想を共にと約束した保坂を何度となく説得しているが、結局別々の道を行くことになったという決別の思いを、「わたくしはかきりみちをまがる」と同道をあきらめ「かつきり」と「まがる」と決意を強調して書き記している(趣旨)としたことと同感いたしました。全ての物は事は純化していくほどに本来の姿が現れるものだと思います。賢治の純化への姿、法華経を通した菩薩の生き方に同意できなかった保坂嘉内とはつきり決別すると決意した姿を述べながらも、尚「またさびしくなるのはきまっています」と思想と友情の狭間に迷う賢治の姿にその葛藤があらわれており、ややもすると人格化されがちな賢治の人間としての姿に共感を覚えました。

へ純化するほどに孤独になる。それを賢治は三人との姿を通して教えてくれたのでは

なからうかと思いました。しかし、その純化の深化は賢治の人間への深い洞察となり、そして人間精神の普遍性迄たどり着き、そこから発した文学は多くの愛読者を作り、世界への広がりとなって行ったのではないのでしょうか。2、賢治は「この冬だつて」「こいらの句のいいふぶきのなかで」「凍えさうになりながらいつまでもいつまでもいつたり来たりしてあました」と言う自分の「Deer heritage Punkt」(聖なる地点)を小岩井農場の中に見つけ出しました。現在全国からみえる多くの観光客は何を指して小岩井農場に来るのでしようか。広々とした農場の姿や、のびのびとした緑に映える牧野、賢治の愛したところを観たい等々、夫々に目的・思いが多々あるのだらうと思いますが、私は今回「賢治歩行詩考」を通して歩いてみて、人々が意識的であれ無意識的であれ、心のどこかで夫々の「Deer heritage Punkt」(聖なる地点)を探し集って来ているのではないかと思つたりしました。そして私にとっての聖なる地点はどこにあるのか、又それを感じとれる豊かな感性が今の自分にあるのか、今回の賢治の歩行詩考を通して問いかけられたような気がしています。

この参加報告は長編詩「小岩井農場」をもとに、岡澤さ



小岩井駅の詩碑前全員集合写真

得業論文展を終えて

岩手大学ミュージアム館長
岡田 幸助

ミュージアム本館の照明改善、展示機器の充実を図るための予算要求が採択され、それには「岩手大学ミュージアム事業」(岩手大学OBを知ってもらうための展示)「宮澤賢治企画展」として採択された。本事業では、企画展示を実施するとともに、併せて照明改善及び展示機器を整備する。情報メディアセンターが本事業を実施することとなるが、関係学部、大学教育総合センター、宮澤賢治センター等との密なる連携のもとで実施したい、とありました。

これまで賢治関係の展示は農業教育資料館が担っており、ミュージアム本館では各学部で得られた教育研究成果の公開を展示のコンセプトとしていたのですが、些か当惑しました。賢治関係の資料は花巻市にあります宮澤賢治記念館を始め、既に各所で公表、展示され尽くしています。

何が残っているかと考えましたところ、彼の得業論文の表紙はコピーなどで公開されていますが、内容はあまり知られていないことに気づきました。当時は卒業論文のことを得業論文といっていました。具合の良いことにその本物は図書館に保管されています。

そこで早速、課長さんに本物を見せてもらうことにしました。係員が厳重に保管された金庫から白い手袋をはめ、うやうやしく運んできた論文はオレンジ色の袱紗に包まれ、他の級友の論文と一緒に綴じられていました。紙は茶色くなり、脆く、論文に触れることははばかられました。たまたまデジカメを持っていたので一枚だけパチリと撮影しました。これが後のポスター写真になりました。

この卒業論文を展示してよいかどうかについては、個人情報保護法との関わりから問題があるのではとの指摘が別の係員からありました。卒業論文は学位論文とは異なり、試験の答案や通信簿と同じで、個人の情報ですが、学位論文は公開が目的ですが、卒業論文は本人の承諾無しには公開できません。そこで、地域連携推進センターの法律の専門家の先生の助言を得ることにしました。その結果判ったことは、賢治が亡くなって七十年以上経っていますが、その権利は永久に遺族に引き継がれます。これを著作者人格権といい、公表権、氏名表示権、同一性保持権(内容を勝手に改変させない権利)が含まれます。

ます。そこでまず遺族の権利を保有する花巻の林風舎から展示の許可をとりました。

次に得業論文の内容を語れる人は誰かということになり、現および元農業教育資料館館長に相談したところ、農業教育資料館研究員の亀井 茂先生が最も適任であるということと、亀井先生に相談に行きました。亀井先生は平成十六年六月発行の早稲峰三十号に「宮澤賢治と盛岡高等農林学校断片(11) 盛岡附近地質調査と賢治得業論文めぐって」という論文を発表されており、その内容に沿った展示とすることにしました。次にどこにどのような展示にするかですが、本物は火災の危険のある本館では展示できないので、全ページを写真に撮り、パネル展示とすることにしました。場所は農学部関連の展示をしている展示室2の一隅としました。写真は図書館職員の手で撮影されました。撮影に立ち会っていませんので詳細は分かりませんが、紙の質感を出すために大変苦労されたものと伺っています。またポスターは地域連携推進センターに作っていただきました。チラシは岩手県庁の教育記者クラブに持ち込みました。展示会の記念講演会は賢治センターの例会として十一月十一日に実施され、講師の亀井先生から得業論文に係わる内容が紹介されました。

論文は盛岡上田(現大学所在地)上、御明神(現在の牧場のあるところ)、好摩(啄木の古里、洪氏の近く)、大谷地(花巻の羅須地人協会の近く)の四方所の土壌にどの程度植物の栄養になるものか含まれているかを調べてみたものです。その結果、植物に必須の加里成分の量には問題はないが、燐酸は不足であることが分かったと言ったものでした。この論文がきっかけで、賢治は一生涯土壌の改良に係わり、最後の仕事として碎石工場技師に結びついて行くのです。

得業論文の実物をみて感じること、先生に提出するものであるため字が丁寧であること、引用文献をきちんとあげていること、関 豊太郎先生の教室ではなく、古川伸衛門先生の教室に入ったこと、そこで謝辞をきちんと第一に古川教授、第二に關教授の順であげていることなど、賢治

のやさしいまじめな人柄が偲ばれるものでありました。現在も学生達は教室選びでパトロールを繰り返していることを思うと、級友に席をゆずったところなど微笑ましく思います。

これらの内容は岩手日報を皮切りに、読売新聞、朝日新聞、テレビ岩手、NHKが取り上げてくれました。極め付けはNHKのテレビとラジオで全国に紹介され、今でも各地の知人から見た、聞いたと知らせてきます。賢治の人氣はこれ程にすごいと改めて知らされました。私は賢治についてはずぶの素人ですので、今後とも勉強をしていきたいと思えます。

最後になりましたが、協力いただきました亀井 茂先生を始め、情報メディアセンター図書館部門、地域連携推進センター、農業教育資料館、宮澤賢治センターの関係者に深謝いたします。

役員挨拶



中村 安宏

岩手大学人文社会科学部で日本思想史を担当しております中村安宏です。私は江戸時代思想について、儒学思想を中心に研究しています。宮澤賢治については全くの素人ですが、現在は、賢治と島地大等との関係を中心に、賢治を育てた仏教的環境について明らかにしていきたいと考えています。このような点から見ていこうとする時、まだまだ多くの史料が埋もれているように思います。現在大学では地域貢献が叫ばれています。が、これについて私は、公開講座などを通して、大学が有している知的資源を地域に提供していくことも大切ですが、それだけではなく、地域に眠っている知的遺産を発掘し、その意義を明らかにして、学生や地域の方々の地域への理解を深めるために貢献していくことも重要なのではないかと考えています。どこまで出来るか分かりませんが、地の利を生かした研究を進めていけたらと思っています。どうか宜しくお願いいたします。

定例研究会

第三回定例研究会

専門的力量と
ブレゼンテーション力の両立
〜村松舜祐博士を通して
賢治に当たる光〜

第三回定例研究会は、農学部の鈴木幸一教授をお迎えして、九月八日(金)に、農学部会議室で行われた。鈴木教授は、昆虫学研究における世界的業績の持ち主。今回は、「村松博士から賢治へ」と題した講演。鈴木教授の賢治体験を出版として、賢治も教を受けた村松舜祐博士の納豆に関する業績の紹介から「経埋ムベキ山」に至った講演。パワ・ポイント十一画面による明快な講演。時間はあっという間に過ぎた。聴衆約二十五名。(望月)

第四回定例研究会

十一月の定例研究会は、亀井茂氏(農学部附属農業教育資料館研究員)が「賢治の得業論文について」と題して話して下さった。大学ミュージアムにおける「賢治得業論文展」ともあいまって、また一つ、賢治とこの大学の研究の関わりを身近に知ることが出た。

亀井氏は、賢治の卒論が扱った「腐食質土壌」が今日では「黒ボク土」と言われていること、賢治はこの火山灰由来

第五回定例研究会

十二月の定例研究会は、砂山稔氏(副代表、人文社会科学部教授)による「詩語としての『銀河』」李白から賢治へ」と題する発表として、十二月十五日(金)十七時〜十八時に開催された。砂山氏は賢治の思想・文学の中心部分の東アジアにおける系譜を探ることを目的とし、時間の制約もあったが、大略、

- 色々な形があつてよいのだと思ふ。(山本)
- 1、賢治の「銀河」の用例、「銀河」と「銀河系」
 - 2、賢治と漢詩
 - 3、李白・江総と「銀河」、芭蕉の「銀河の序」
 - 4、「銀河鉄道の夜」
- 結語
- の順に話は進んだ。中国で李白以降とりわけはつきりしてきた、詩の中の「銀河」イメージの形成や、銀河への言及を年代を追って紹介する一方、賢治の作品の中で「銀河」という語がどのように使われているかを詳細に調べ、資料として配付して下さった。賢治の漢詩への関心、文語詩との関連も指摘され(ふだん欧米の文化を関心や研究の中心に考えている私などにとつては)さらに賢治の世界が広がった思いがした。参加者からは、「銀河鉄道の夜」における銀河の意味についてなど

我が荒涼たる供積不良土 碎石工場技師への道程

賢治得業論文展記念
(宮澤賢治センター11月例会)

日時：平成18年11月7日(火) 17:00-18:00
演題：「賢治の得業論文について」
話題提供者：亀井茂氏
岩手大学農学部附属農業教育資料館研究員
会場：岩大図書館生涯学習・多目的学習室(無料)

賢治得業論文展
期間：平成18年11月1日-30日
毎日開館10:00-15:00
場所：ミュージアム本館第2展示室

宮澤賢治センター・岩手大学ミュージアム
地域連携推進センター・農学部 共催
連絡先：宮澤賢治センター(岩手大学内)
電話 019-621-6672 E-mail: kenji@iwate-u.ac.jp

時間が持ち寄った作品についての意見交換会である。その時の作品にもよるが、原則としては歌会方式で、事前に提出された作品を無記名に印刷したのから選歌をし、それに従いながらの意見交換をしている。

なお、会場は、農学部及び農学部同窓会北水会の御厚意を得て、いずれも「百年記念館」で行っている。(また、第七回は、二〇〇七年の一月九日(火) 十四時四十五分から開催した。)

作品については、創刊号では、第二回までの報告をしたので、今回は、第三回(九月六日(水))、第四回(十月五日(木))、第五回(十一月十五日(水))、第六回(十二月十一日(月))の四回からの会員の作品を示すこと(望月)。

宮澤賢治 記念短歌会

「宮澤賢治記念短歌会」は盛岡高等農林時代の賢治の文学活動の中心であった「短歌」の実作を通して賢治を身近に感じようとする会である。

したがって、短歌に対する態度も、芸術的な完成を目指すというよりは、あくまで「短歌」という形式を通して若き時代の賢治を体感的に理解することを優先させようとする会である。

七月六日(木)に第一回を行って以来、毎月活動が続いている。会の時間は、おおよそ一時間十五分程度。最初の十五分が望月善次会員による「賢治短歌ミニ講義」。後の一

大林あや子
江繁のひと木のかつら香に
満つる山の優しさに深呼吸
する(タイマグラにて)

風立ちて花のはの影揺らぎ
おりオカトラの尾の群れ咲
く道のべ

北田まゆみ
赤ワインもモーツァルトも
眠らせてくれぬ夜更けは誰
かに囁く

「本当にかなしい時は泣けないよ」日向ぼっここの猫に
呟く

三木与志夫
こわごとと森菰池が食った
のがトマトというは何か
嬉しい

追いつける視線の先を導き
てCangraの蝶は黄色たるべ
し

平田真子
岩山の展望台から臨む夜の
ざらつく街に消えし山川
異国(スペイン)の自作の
街に思い馳す閉じたガイド
ブックの冷笑

向井田薫
建前と本音をうまく使い分
けこの世を生きる人もあり
せば

もう少しもう大丈夫と思え
ども小春日和に大根振りぬ
く

吉田直美
キラキラとまたたく星も舞
台なら賢治もきつこうし
て歩いた

南斜花壇急な斜面の暗闇に
ほのかに浮かぶ白き一人

入門・宮澤賢治の短歌(一)

カワイソウな賢治短歌

賢治研究における短歌の位置

望月善次

賢治短歌はカワイソウな存在である。文学作品として読まれるよりも、伝記の一資料として読まれる場合が多いからである。

例えば左記の二つなどにおける賢治作品の取り扱い、(それ自体は、優れた仕事ではあるが)そうした典型的事例であろう。

- 萩原昌好監修・解説 『宮澤賢治記念館企画展 示』 埼玉秩父と賢治(一九九四・四・一)
一・三〇)
『新校本宮澤賢治全集 第一六巻(下) 補遺・資料』(筑摩書房、二〇〇一)。

賢治の盛岡高等農林学校時代に深く関わる私達岩手大学関係者にとっては、この事実はとても見逃すことはできない。なぜなら、盛岡高等農林学校時代の作品活動の中心は短歌であったわけであるし、この時期こそは文学者賢治の実質的な出発時期としてもよ

いからである。
もちろん先行研究の中にも「賢治の短歌の中には全てが入っている」とした森荘巳池『宮澤賢治歌集』(日本書院、一九四六)／創元文庫(一九五二)や相当以前から賢治

短歌への考察を続けて来た佐藤通雅『宮澤賢治の文学世界』短歌と童話(泰流社、一九七九)及び佐藤の個人編集誌『路上』における賢治短歌考察や岡井隆『文語詩人 宮澤賢治』(筑摩書房、一九九〇)の例もある。

また、短歌研究のこうした状況に関しては、賢治研究の中でも反省的機運もあり、二〇〇四年の統橋達雄筆録『宮澤賢治の短歌を詠む』や二〇〇五年の森三紗による森荘巳池本の復刊(未知谷)や昨年の栗原敦・杉浦静による『新編宮澤賢治歌集』(蒼丘書林)等が出版されたのは、その象徴的事例であろう。

筆者もまた、こうした状況を変えるため、賢治短歌の評釈『盛岡タイムス』二〇〇五・四・一から連日、や宮澤賢治学会イーハトーブセンターの研究大会での「文学作品としての賢治短歌」を論題に掲げた発表(二〇〇五・九・二三/二〇〇六・九・二三)等の試みを行っている。

しかし、いざれにしても、こうした動きも少数派であることは間違いない。今回は、そうした「カワイソウな賢治短歌」という結論のみを言っておこう。

の

事務局だよ

★ますむらひろし氏講演会開催

「夢の視線」
三月六日(火) 三時から五時。
岩手大学学生センターG1教室にて。



宮澤賢治センター ホームページ開設

宮澤賢治センターのホームページが出来ました。今まで暫定的な内容で公開しておりましたが、二月中旬より新しいデザイン・内容で正式に公開しております。今回のリニューアルでは、トップページにFlashという機能を使用し、賢治ゆかりの地や賢治が名付けた理想郷イーハトーブを思い浮かべさせるような場所の画像を順番に表示させるようにしましたので、まずはその画像をお楽しみ下さい。

また、宮澤賢治センターへの入会手続きがホームページ上から簡単に出来るようになりました。名前やメールアドレスなど必要事項を記入していただき、次に「登録ボタン」を押していたら、宮澤賢治センター

の

★新役員紹介(十二月より)

- (五十音順)
飯村裕樹(岩手大学教育学部 生涯教育課程一年)
亀井 茂(岩手大学農学部 属農業教育資料館研究員)
中村安宏(岩手大学人文社会科学部助教授)
向井田薫(岩手大学農学部 水会名誉会員)

★全国宮澤賢治学生研究会発足
二〇〇六年十月二十一日に、稲垣大助会長のもと全国宮澤賢治学生研究会が発足しました。二〇〇七年二月現在、四

の定例研究会や様々な催し物の案内をお届けするメールマガジンへ自動的に登録されるとともに、担当者にも情報がメールで届くようになっていきます。
宮澤賢治センターのホームページは、出来たばかりで内容はまだまだです。宮澤賢治センターの役割は、「賢治へ

の

回の研究会が開催され、約一〇〇名の会員で活動を行っており、詳しい報告は次号に掲載いたします。

★投稿募集
会員の皆様の投稿をお待ちしております。
尚、掲載の可否、時期につきましては役員会で決定させていただきます。

(内容) 宮澤賢治に関する論考、エッセイ、イラスト(白黒掲載となります)など。
(字数) 一〇〇〇字程度(相

の関心を結集」というところにありますように、みなさんのよりどころになるよう内容を充実させていきたいと思っておりますので、賢治に関する様々な情報、ホームページに関するご意見・ご要望等ございましたら、どんなお寄せ下さい。
(岩手大学技術部 那須川徳博)

の

談に応じます)
(送付先)
〒〇二〇一八五五〇
盛岡市上田三二一八三四
岩手大学人文社会科学部
秋田淳子
E-mail:junko@iwate-u.ac.jp

なるべくワードを使用し、メールか郵送にてご入稿下さい。(問い合わせ先)
〇一九(六二二)六七四六(ファックス兼用)
*ご連絡先の記載を宜しくお願いたします。

★名簿作成について
現在、名簿の配布準備を進めております。
同封のがきで、掲載可否事項のご連絡を宜しくお願いたします。

★入会案内
「賢治への関心、それだけが条件です。(会費は徴収しません)。」左記のセンターへ、お申し込みください。会員拡大のため、周囲の方にもお声をおかけください。

●編集後記
老体に鞭打ち、通信一号を完成させることができました。次号もご期待下さい。(秋)

●発行
宮澤賢治センター通信
〒〇二〇一八五五〇
盛岡市上田四丁目三番五号
電話 〇一九(六二二)六六七二
FAX 〇一九(六二二)六四九三
E-mail:kenji@iwate-u.ac.jp
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者 望月善次
印刷 杜陵高速印刷株式会社

Screenshot of the Miyazawa Kenji Center website showing navigation, news, and contact information.

http://kenji.cg.cis.iwate-u.ac.jp/